

末黒野

すぐろの

3月号 (通巻823号)



新 国 旗

小川玉泉

西に富士北に筑波の冬田道
冬空の紺のさゆらぎ渡船出づ
臘梅にまつはる風の止みにけり
外灯を浴ぶる冬菊臙脂色

年迎ふ洗ひ晒を身にまとひ
杖頼る庭への一步年新た
新しき国旗に替へぬ大旦
初日さす庭や真紅の姫りんご
校庭に三羽の鳩や初日差す
元朝の路地を奥へと石叩
神鹿の瞳のつぶら初詣
三人目の曾孫の泣き初め目の当たり

枯木星

松本三千夫

池渡る風の遅速や冬牡丹
神苑の源氏の池や浮寝鳥
駅前の平作川や残り鷺
島一つ置き横須賀の海寒し
妻を呼ぶときに最も息白し
瀬の音の夜つびて霜を育てをり
姫娑羅の冬芽へ月は金ン降らす
仕舞風呂踵の胼の口あけて
村すでに深き眠りや枯木星
起き抜きの懈怠ごころや風邪籠
数へ日や風の音さへ常ならず
クリスマスはわが誕生日八十五

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

枯蓮

森清信子

敗荷を円かに包む日差かな
吐く息豊かに長し紅葉山
ポケットにシヨ一の半券小鳥来る
繭のごと眠る茅屋小六月
出港の汽笛に散りぬ冬かもめ
枯蓮の日矢にきはだち濁り池
枯蓮の池面を焦がし夕茜
揚舟の皆伏せられて鴨の陣
帰り花夕べの静寂深めけり
綿虫や日差の遠き高野山

時雨

安斎久英

小春日や笥の雫光り落つ
潜り戸の通用門や寺小春
反古足して櫓火再び育てをり
波螂忌や白山吹の返り咲く
一時雨あるやも仰ぐ杉の末えん
快き水車のリズム小六月
神妙に採血の腕十二月
禅寺のふところ閑と竜の玉
釣船に即かず離れぬ都鳥
沖よりの風に寒林鳴るばかり



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



神無月 加藤静江

桜紅葉終の一葉の華やげる
鳥声や八橋乾く神無月
片時雨人影のなき扇塚
水亭の戸を開け放つ小六月
反り橋や雪吊の縄あたらしき
枯色の林泉を彩り冬桜
菰卷の結び目花をなぞらへて

朴落葉 岡野里子

浜離宮 菅野日出子

靄ごめの山並雨の紅葉狩
日面の池へ彩映ゆ櫛紅葉
木隠れの湖の煌めき冬紅葉
紅葉散る渡しの風の繋り舟
花枇杷や藁屋の瀬戸の釣瓶井戸
うらおもて見せて池面や朴落葉
回廊の朱の欄や石路の花

魯田に雀の群や道の駅
観光客さけ塔頭へ冬もみぢ
再会を約すむなしさ冬の星
野方図に枝張る枇杷の花のさび
浜離宮石路の縁取る馬場の跡
さざ波の寄する池亭や浮寝鳥
菰卷いて離宮の松の威風かな

磯千鳥 堺 昌子

見霽かす紅葉の間々や町の黙
川底の紅葉嵩なす流れかな
山門や紅葉浄土の阿弥陀堂
堂塔を染めをる紅葉かつ散りぬ
石段の多き寺領や冬の鴟
山せまる海沿ひの道笹子鳴く
荒波の崩るる音や磯千鳥

かづら橋 中野久雄

渦潮の鳴りを潜めぬ小春風
名にし負ふ四国三郎冬の霧
着ぶくれて怖づ怖づ渉るかづら橋
滾つ瀬の溪谷染むる冬紅葉
懐にけむり一筋山眠る
久びさの金毘羅参り神の留守
妻留守の夕餉はおでん独り酌む

冬 灯 西川みほ

晩秋の風高原のけもの道
保母の振る旗見え隠れ芒原
平等院の紅映しこみ池澄めり
太公望並み居る湖岸鴨の群
町めぐる馬車に火鉢や蔵の町
書く文の見舞ばかりや冬灯
虎落笛妣の嫌ひし夜爪切る

冬ぬくし 森清 堯

谷に渡す朱の太鼓橋冬の鷺
鳩伸ばす首の虹色冬ぬくし
溪谷の岩床白し散紅葉
枯急ぐ葦や湿地の水の鏝
入江へと下る木道夕笹子
来し方を語る背丸し日向ぼこ
冬ぬくし地の日啄む雀どち

青炎集

小川玉泉選



横浜 外山節子

大網白里 亀卦川菊枝

美容師へ頭預けて小六月

児の問ひに頷くばかり毛系編む

雪吊の松見えを切る役者ぶり

五十年佳みて馴染みぬ隙間風

省略のわが家なりけり年用意

歳晩や太極拳のゆるやかに

横浜 太田良一

本通り避けて裏行く一の酉

大根を抱き眠る子乳母車

茶柱やよき旅立ちの冬の朝

冴ゆる夜や眼下に遠き港の灯

着ぶくれて割込む席をためらへり

裏山に日のあたり初む葱畑

猫老いて眠る小春の小座布団

佗助や家を囲みて土竜道

隠れ焚く火に枯菊の香のたてり

波に散る智恵子の浜の千鳥かな

散髪の椅子にまどろむ師走かな

通院の書き込み多し古曆

横浜 橋場美篤

わに口の一打の響き寺小春

明けきらぬ裏手の繁み笹子鳴く

踏切を枯葉の舞と渡りけり

出ぬ声に手話めく会話室の花

スリッパの先病廊の冷え残る

好日や空に融けさう冬桜

横浜 原 久米

作務僧に馴れ近づくや冬鴉
鐘楼の天辺に鳩冬日和
日当りに群るる雀や石路の花
身罷りし姉や寺院の冬紅葉
冬来たる取つときの服吊しをり
今朝の冬槌音高き分譲地

大網白里 鈴木礼子

小賀玉の木を飛び立てり冬の鳥
冬耕のトラクター畑まつ平
産土に紐解きの児のなかりけり
初霜の畑を被ふ白布とも
学童を見守る辻や冬の風
凧の空青青と曇照る

狭山 沼崎千枝

護摩を焚く読経の響き花八手
丈六の不動明王冬の雲
雨止むや地藏の肩の散紅葉
山眠る磴百段の奥の院
目薬の冷たさ脳に響きけり
涸川や浚渫の音響きをり

横浜 森 一枝

冬晴や梵鐘凜と影正す
たしかなる牡丹の冬芽頼朝忌
茶の花の凜と咲き初む座禅堂
散り紅葉鎧へる様の五輪塔
雲水の声明ひびき冬木立
遣影の子と雲龍拝す小春かな

横浜 都留百太郎

越後はや海よりの雪横なぐり
冬はじめ土を被するアロエの根
存分に薪を積み上げ冬構
次の芽の兆しを見せて木の葉落つ
頬被り解かず会釈の村の衆
覗く程ねんねこの子のもぐりけり

横浜 土田 亮

垣外の山茶花散るにまかせをり
冬波の車窓打つかに五能線
海坂にすくと消ゆる冬没日
白神山地熊に注意の遊歩道
奥州の山並幾重眠りをり
喪の葉書出すも貰ふも十二月

耕 土 集

松本三千夫選



寒さ満つ先づは蜂蜜湯煎して

実南天ひと粒ごとに日当たりて

三日目のおでんの始末吾ひとり

金色の小鳥の如く散る银杏

雨も又よろし古刹の冬紅葉

横浜 谷島 弘康

相模原 内田 梢

石切場に枯るるものなし冬来る
今朝の冬ひとかたまりの川の鯉
喉走る水の硬さや今朝の冬
横顔の愁ひをふくむ冬帽子
自在鉤へゆるる炎や櫓の宿

三鷹 小林 清彦

横浜 漆山 浩一

凧の行く手を阻むビルの群れ
老優の逝きて辺りの冬景色
護摩焚くや伽藍を包む冬紅葉
散紅葉濡れて映えたる石畳
賀状書く無事息災の証とて

面ぬぎて湯気湧き出づる寒稽古
球追ひて落葉舞ひ上ぐ子らの声
靴音と咳ひびく投票所
笛吹きて師走を仕切る駅広場
短日の裸電球古書の市

横浜 北郷 和顔

峰 幸子

落葉掻く音もさやけき日和かな
陽と雨と風に漉かれぬ散紅葉
山小屋の施錠の音や雪催
初雪ややがて理もるる小屋を去る
年の瀬やあれこれよぎる夜更け酒

障子貼り終へ一服の静寂かな
狛大を籠に掛据ゑて山眠る
海底めく青き電飾暮の街
夕照に燃えあがりたる枯野かな
悔ひとつ残して年の暮るるかな